紹介

●光海君時代の滿鮮關係

文學博士　稻葉岩吉著

明末清初に於ける明清鮮の三角關係は近世東洋史上に於て最も興味ある研究題目の一たる事は言ふ迄もない。殊に明の勢力が漸減して清の勢力が增進する間に介在して朝鮮が宗主國たる明に對して如何なる態度に出たか、又新興清朝に對して如何なる策戰を以て臨んだかといふ事は、從來の朝鮮諸朝が支那並に日本に對して乘つた態度と照合して格段の興味を覺えるものであり、眞に一種のキャスチング・ヴオウトを握つて居る半島王朝の行動、向背は當時の明清兩國にとつて緊要な事柄に外ならなかつた。而して朝鮮は初めは宗主國の恩義、殊に宣祖壬辰役に與へられたりの恩義に對して感謝し飽く迄之に忠誠を誓ひ、之が應援を惜しまぬ態度に出たと思はれるが、その時に既に大勢の赴く所明の敗亡清の興隆に到るべきを察せる士もあつて、兩派の爭が次第に激化し內外兩方面の各種の問題に事件に抗爭する有樣となり、遂に光海君時代の朝鮮軍の清朝投降となり、やがて王の廢位を見、代つて清朝反對派に擁立されて仁祖の卽位をみたが、此時に到つて果然朝鮮は清朝兩度の征伐を蒙り城下の盟をなして全然降服するに到り、兩國の關係は一段落を告ぐる事となつたのである。蓋し之は當時の大勢からして當然の事であつて、朝鮮が如何に頑强に抵抗すればとて到底支へ得べきものでなく、新に清朝に宗屬の關係を結ぶに至るは豫想された運命と言つても差支へないのである。かくの如くして朝鮮はよしんば有識具眼の士あつたにしても大勢如何ともすべきなく、清朝に服屬し、清朝は後顧の憂なくして力を明討伐に專らにし遂に入關して中原の主となる事を得たのであつた。されば明末清初に於ける朝鮮の態度情態は確に研究に値する價値あるものであつて、吾人滿洲學徒の一度は觸れざるを得ない重要な事項といふべきである。而して茲に紹介しようとする「光海君時代の滿鮮關係」の著者君山稻葉岩吉博士は夙に清鮮史研究の權威として學界知名の士であつて、今日この方面の研究家にして博士の名聲を知らざるものなしといふも憚らない。その權威たる稻葉博士が多年研鑽の成果を先に京都帝國大學に學位請求論文として提出され、昨年目出度學位を獲得さるゝや、學位令の定むる所に從つて之を附板上梓され、親しく學界に問はれたものが卽ち「光海君時代の滿鮮關係」たる本書に外ならぬ。この書たるや以下述べる如き內容の勞著であつて、標題の示す如く主として光海君時代の朝鮮の對清朝關係を論ぜられたものであるが、併せてその前後の兩國の關係、又明との關係を論ぜられた二百六十一頁に亘る大論文で、前述の明末清初の研究に手を染むるものゝ必讀のものである事言を俟たない所である。さて本書は七章に分れて居るが、第一章叙說には光海君時代の概觀を叙し、

第二章「光海君以前の滿鮮關係」は、第一節明と朝鮮との初期關係、第二節明と女眞との關係、第三節朝鮮と女眞との關係、第四節職帖問題、第五節女眞夾擊に對する朝鮮の態度の五節に分けて明代女眞の發展に伴ふ明及び朝鮮との關係を各方面から述べられたものである。第三章は「光海君初政に於ける滿洲及び支那との關係」であつて、二節に分けて第一節に「清の太祖に關する諸記錄」、第二節に「壬辰役直後に於ける明國との諸關係」を論じ、その引用の諸記事は吾人後學の大いに請益する所である。而してこれ迄は本書に於ては第四章以下の主論に對する序論前提ともいふべきで、これだけの事を基礎として宜しく次章以下を考察せねばならぬのである。さて第四章は「明清戰爭に對する朝鮮の態度」であつて、分けて五節とし、第一節清の太祖の宣戰、第二節撫順失陷の移咨に就て、第三節清の太祖の移書、第四節徵兵入送の可否、第五節參戰までの曲折となつて居る。之は要するに明清二國の天下分け目の戰といふべき薩爾滸役——朝鮮側にて所謂深河役——に關して明が朝鮮に援兵を求め來つたに對して朝鮮が如何なる態度に出づべきか、又實際とつたかといふ事に對する內部の論議の顚末を各方面の史料により詳論されたものであつて、これによつても當時の朝鮮が如何に動搖し無定見であつたかを一讀よく知り得ると思ふ。第五章は「朝鮮援軍の投降に就いて」であつて博士の識見を示された主要部分である。その第一節は「深河の役」でその戰役の經過の大要を述べ、第二節に「投降までの諸記錄」を掲げて朝鮮軍投降の次第に關する記事を網羅し、第三節「投降は素定の計なる乎」に於て從來姜弘立の投降は光海君の密旨に本づく素定の計なりといはるゝ所の說の理由薄弱にして疑問ある事を指摘し、新發見の史料により然らざる旨を論述されたのである。而して博士がその新說の根據とされた所は管つて博士の發見にかゝる太白山本光海君日記に外ならないのであつて、不過に終つた光海君の爲にその寃を辯じ以て當時に於ける滿鮮二國間の關係のデリケートな有樣をよく述べられたものといつて過言でない。第六章は「戰役直後の三國關係」で、第一節復活せる滿鮮關係、第二節明國の朝鮮監護說、第三節廢位された光海君の三節に分けてその後に於ける餘震の狀況と光海君の不運とを述べられ、第七章を結言として所論を了つて居る。以上述べる如き內容で光海君時代を主として前後に於ける三國の關係を詳述し、獨自の見識を以て明快に論斷された所實に學界の大收穫の一といふべく、後學として厚く博士の勞に謝する所であり、又今後とも愈々博士の加餐を祈り學界の爲に精進されん事を願つて止まぬ次第である。尙本書は附錄として　一、太白山本光海君日記の由來、二、李民寏の柵中日錄　の二項を錄してある。前者に於ては前述博士の論據となつた太白山本光海君日記の由來と博士の發見、その價値について述べられ、後者は姜弘立に隨つて投降した從事官李民寏の朝鮮軍の行動及び投降後の清朝側の見聞を記した手錄に就いて述べられたもので、兩々明末清初の事を知るに最もよい貴重な史料といふべきである。尙又別錄として靑丘學叢第

五號第六號に掲載された「滿洲開國說話の歷史的考察」を再錄されてあるが、之は博士の愈々倦まざる精進振りを示して後學の士を啓發せられたものであつて、一には博士の造詣の深きを知り又一には清朝研究の一のキイを示されたものとして感謝する所である。

（四六倍版、總頁數三百八十六。圖版三。京城大阪屋號書店發行。定價六圓五拾錢）〔鴛淵〕

●讀史方輿紀要索引　支那歷代地名要覽　青山定男編

東方文化學院東京研究所より研究員青山學士の勞力になる本書が出版された。本書の完成に至る迄の經緯は卷頭市村博士の序文に詳細であるが、僅々二個年の間にこの困難なる事業を達成せられた學士の精勵には感服の外ない。

本書は讀史方輿紀要に表れたる三萬の地名を、五十音順に排列し、次に現今の地名にて何處に當るかを記し、翌て方輿紀要の卷數・省・州・縣を擧げて索引に便にしてゐる。故に方輿紀要索引なると共に地名辭典を兼ね、一擧兩得なる所以である。別に附錄として方輿紀要の解說を附し、著者顧祖禹並に父柔謙の傳、方輿紀要著述に至る動機・經過を述べ、方輿紀要各種の版本の考證に及んでゐる。本書の遼東に關する部分は清朝の忌諱に觸るる懼れありし爲、現今の版本には脫落せる部分あるを、稻葉君山博士及び東方文化學院京都研究所所藏抄本によつて補なつてあるのも亦讀者を稗益する所少しとしない。

本書は校正も嚴密であり、優に信賴するに足る可きは言を待たず、方輿紀要原本に於いて比較的疎略に扱はれてゐる塞外の地理が、近時進步せる東洋史學の結果によつて其位置を正確に比定してゐるのも本書の特色の一であり、この點支那にて出版された兩地名辭典に勝つてゐる。只方輿紀要索引を主としたる爲、語數に遜色ある如く感ぜらるゝも亦止むを得ぬことであらう。

若し多少註文をつけるならば、地名の讀み方に一層注意を拂つて欲しかつた。漢音を主として特殊なものは呉音により或は慣用音を用ひて讀んであるが、苦（ク）濟（サイ）は寧ろ（コ）、セイ）の方が普通ではなからうか。葉（エフ）は漢書地理志南陽郡の條下に師古曰音式涉反とあれば（セフ）なる可く、欽（キフ）も丹陽郡條下、師古曰音擒とあれば（セフ）が宜しかる可く、櫟（レキ）は左馮翊條下、如淳曰櫟音藥とあれば（ヤク）が適當であり、滸（キヨ）は（コ）とすべきであらう。斜（シヤ）も（ヤ）とする方がよく、斯かる點では古人は仲々精確で通俗三國志などにも褒斜（ホウヤ）と假名がついてゐる。面倒でも之は歷史的字音による方が宜しかつた。尤も索引は便利の爲であるから、大した問題ではなく、別に畫引索引もあるから實用の上には差支へない。

（東方文化學院東京研究所發行。定價金七圓五拾錢）〔宮崎〕